

革命期の一小説における sensibilité について

宮 本 陽 子

La sensibilité dans un roman sous la Révolution

Yoko MIYAMOTO

0

サドの長編小説『アリーヌとヴァルクール、あるいは哲学小説』¹⁾は、「市民S★★★」²⁾という署名を付され、1795年、パリのジルアール書店から出版された。副題として、サドは「革命の一年前にバスチーユ獄で書かれた」と記しているが、すでに1786年の手紙³⁾の文中で、彼がこの作品の準備をしていたことが明らかにされている。

ところで、晩年の歴史小説を別にすれば、サドは長編小説作品のほとんどすべてをバスチーユ攻略の4年前の1785年から、ロベスピエール失脚の3年後の1797年までの12年間に著している。先ず、1785年、バスチーユの囚人であったサドが「容易に隠せるように（以下太字強調宮本）」⁴⁾ 12.1 m の巻紙に丹念に清書した、『ソドムの120日、あるいは放蕩学校』⁵⁾。これは1789年7月にサドがシャラントンに移送される際に失われ、今世紀まで日の目を見ることがなかった作品である。次に、1791年に発表された『ジュスチヌ、あるいは美德の不幸』⁶⁾。そして1795年、すなわち『アリーヌとヴァルクール』と同じ年に出版された『閨房哲学』⁷⁾。さらに1797年出版の『新ジュスチヌ、あるいは美德の不幸、続いてジュリエットの物語、あるいは悪徳の栄え』⁸⁾。『アリーヌとヴァルクール』以外のこれらの長編小説は、「容易に隠せるように」巻紙に書かれたり、匿名で出版されたりしている。

この時期のサドの小説作品の特徴として、物語内で登場人物が語り手と聞き手に分けられ、ある人物が語る物語を他の人物が聞くといった事態が見られる。そのうち上記の匿名出版の作品においては、作中で語られる物語等の聞き手は、いずれもリベルタンと呼び得る登場人物とされている。『ソドムの120日』は、世間から隔絶されたシリング城の中で4人の語り女たちによって語られた放蕩の物語が、その大部分を成しているが、語り女たちは専ら4人のリベル

タンのために物語を語る。『ジュスチヌ、あるいは美德の不幸』は、主人公ジュスチヌの一人称体の語りによって語られるが、彼女がリベルチヌである姉のジュリエットに己れの不幸を物語るといのが物語の設定となっている。また、『ジュリエットの物語』においては、ジュリエットの放蕩仲間に彼女自身が自分の物語を語り聞かせるという設定がとられている。さらに作中で、登場人物でリベルタンのひとり、ノワルスイユがジュリエットに犯罪哲学についての演説をしている間、放蕩の犠牲者である彼の妻は居眠りをしている。犠牲者は命令を聞くだけで、物語や推論を聞く権利はない。会話体小説『閨房哲学』においては、途中でリベルタンのひとり、ミルヴェル騎士が「フランス人よ共和国主義者たらんとすればあと一息だ」と題されたパンフレットを読み上げるが、その際、それまで放蕩の道具的役割を務めていた庭師オーギュスタンは「おまえには関係がないから出て行きなさい」⁹⁾と部屋を追いつけられ、リベルタンたちだけが聞き手となる。作品が匿名で出版されること、つまり、公共性を否定した形で出版されることと、作品内の語りが、閉域で、特定の相手に向けられていることは通底しているのである。そうした閉域性の中でこそ、サドは、リベルタンの欲望を果てしなく押し抜けることができるのだ。

ところが、『市民S★★★★』と署名された『アリーヌとヴァルクール』は書簡体小説であり、その書き手は、ブラモン法院長以外はほとんど皆、自他共に〈sensible〉であることを認め、それをひとつの美德とする人物たちである。手紙の受取人も、ブラモン法院長の手紙の受取人ドルブール以外は、やはりこの〈sensibles〉な人物たちである。彼らはその性格上、当然、様々な故意の言い落とし¹⁰⁾を用いずにはブラモン法院長らの犯罪を語らない。また、作品が一般に公開されたものであるという条件と相俟って、リベルタンとはいえブラモン法院長自身も犯罪について語るに際し、専ら狩猟や戦争の比喩を使うことを好み、その現実をあからさまに示そうとはしない。すでに、拙論『ジュスチヌの3つのテキストについて』¹¹⁾の中で、ジュスチヌ物語の3つのヴェルシオン間の変化に注目することから、サドにおいては、ジュネットの理論¹²⁾とは逆に、語り方の変化が出来事の展開を決定するということを指摘したが、この『アリーヌとヴァルクール』においても、その遂行があからさまに語られることのない犯罪は、発展性に欠け、成就することが困難になっている。貞淑な妻ブラモン夫人が、名指すことさえ憚り、「より悪い事態」¹³⁾と呼ぶブラモン法院長の近親相姦の企ては失敗に終わらざるを得ない。また、食人国ビュチュアのリベルタン、サラミエントの王国乗取計画も頓挫する。ここでは、語ることさえ犯罪であるような言葉で犯罪の遂行をあからさまに示し、そのことでさらなる犯罪を生み出してゆく、サドの長編小説エクリチュール特有の、あのダイナミズムは期待できない。

犯罪の構築する言葉に代わって、ここで繁茂横溢を極めているのが〈sensibilité〉に関する表

現である。〈sensibles〉な大勢の人物たちが繰り広げる〈scènes touchantes〉がやはり〈sensible〉な人物の筆によって、同じく〈sensible〉な人物に宛てて飽くことなく語り続けられる。彼らの間にあって〈sensibilité〉は複数の鏡の間に置かれた事物のように限りなく倍増されてゆく。

ところで、〈sensibilité〉、あるいは〈sensible〉というのは、プレヴォー、ルソーに始まって革命期に頻繁に用いられた表現である。マラー、ミラボー、コンドルセ、ロベスピエール、サン=ジュスト、あるいは憲法制定議会の《Procès-Verbaux》の執筆者等、多くの革命家たちが好んで使った言葉であり、しかもファーブル・デグランチャーヌを除けば、彼らの多くはサドの〈sensibles〉な人物たちと同様、その言葉にひとつの重要な美徳としての高い価値を与えていた。「彼らの『回想録』、『書簡』、『論説』はとめどなく〈sensibilité〉について語っている。プレヴォーやジャン=ジャック、デイドロのように、彼らは自らが人類でもっとも〈sensibles〉な人間であると宣言し、繰り返しそう証言し、執拗に公言して憚らなかったのである」¹⁴⁾。

しかしこの〈sensibles〉な革命家たちがその主張とは裏腹に、あるいはむしろその帰結として、血腥い現実に入入していったように、あるいはまた、ジュリの〈sensibilité〉がやがて狂気じみたものになり、「愛の美徳の擁護として差し出され」た「この作品が、証明すると見做されていたものを少しずつ告発するようになり、ついには、全く逆のメッセージを放つに至る」¹⁵⁾ように、また、デ・グリューとマノンのそれが二人を砂漠に追いやったように、サドの小説世界も〈sensibilité〉の限らない増幅だけで語り尽くせるものではない。物語の最初において、〈sensible〉な人物にとって〈sensible〉な言葉を重ねてゆくこと、それを同じ気持ちで読んでくれる者がいるということ、そのこと自体がひとつの幸せであった。「何やら知れぬ予感がして、その心地よい錯覚で悲しい現実が慰められます」¹⁶⁾と書くアリーヌにとって、〈sensible〉な心に浮かぶものが「錯覚」であれ、それを語ることで「悲しい現実が慰められ」ていた。ところが〈sensible〉な人物の間で〈sensible〉な言葉を共鳴させればさせるほど、その外にある「悲しい現実」が慰め難いものになってゆき、物語の終わりの方では、「この世で私たちと同じ言葉を話す人の何と少ないことでしょう」¹⁷⁾と嘆き、「私の気持ちを分かってくれるのはお母さまだけです。お母さまだけが私と似た心の持ち主ですから」¹⁸⁾と悲しむことになる。〈sensibilité〉に関する表現だけが増えることと、それによって語り得る世界の大きさが反比例するという事態が、ここに確認されるのである。

このように、〈sensibilité〉の描き出す世界と、現実世界のずれという問題だけならばサドならずとも、〈sensibilité〉について語られた多くの言辞が表していることであるが、『アリーヌとヴァルクール』がそれらと一線を画すのは、この作品が予め、「美徳の擁護」とは「逆のメッセージを放つ」ために差し出されていると思われるからである。同じく革命期に書かれた、サドの他の長編小説においては、とりわけ『新ジュスチヌ』においてはリベルタンたちによっ

て〈sensibilité〉の根絶のための推論が執拗に繰り返されているが、この作品を書いているサドもむしろ攻撃するために、〈sensible〉な言辞を書き連ねているように思われるのだ。つまり〈sensible〉な人物たちの〈sensible〉な言動そのものを、〈sensibilité〉の否定、あるいは告発としているように考え得るのである。ミシェル・ドロンは、『危険な関係』のヴァルモンが院長夫人に浴びせる非難の言葉を引用しながら、リベルタンに言わせれば、「感受性は自らより上にある秩序と折り合おうとし、最後には最も伝統的なキリスト教的美徳と諦念に屈服してしまう」¹⁹⁾ものであると述べているが、まさにこのリベルタンから見た感受性を体現しているのがアリーヌであり、その母ブラモン夫人であり、ヴァルクールである。いかにサドが作品中で〈sensible〉な人物に〈sensibilité〉について語らせようとも、またサドが「それぞれの手紙は(……)その書き手の考え方を見せるものだ」²⁰⁾と付言してみせようとも、ここに現われる〈sensibilité〉は当の人物の発話以前に、その発話に先行しているはずのリベルタン=サドの批判的な視線に貫かれているのだ。つまり、いかなる人物の発話であれ、それが小説の人物である以上、書き手を示すものが何らかの形で刻印されているのである。小説においては、あらゆる言葉、あらゆる出来事が、誰かによって書かれているのだということを忘れてはならない。

従って私たちは、サドにおいて〈sensibilité〉がいかに否定的に捉えられているか、少なくとも〈sensibilité〉がいかにその理想にそぐわない姿で現されているかを確認することを以て、本論の目的としたい。なお、分析に当たって、先に挙げた革命家たちの言説や同時代の他の作家たちの作品も、本来ならば考察の対象にするべきであろうが、それは今後の課題とし、この拙論では先ず手始めに、革命期においてこの特権的価値を与えられていた〈sensibilité〉をキーワードとして『アリーヌとヴァルクール』に関心の焦点を絞ることをここでお断わりしておく。また、〈sensibilité〉、〈sensible〉を、便宜上、それぞれ「感受性」、「感じやすさ」、「感受性の豊かな」、「感じやすい」、「心やさしい」等、適宜、訳し分けながら論を進めてゆくこともここで断わりしておきたい。

1

ミシェル・ドロンは18世紀小説に登場する人物のふたつの典型として、「感受性の豊かな人」を、「政治、あるいは恋愛といった、あるひとつの理想を忠実たらしとする」人物とし、一方「リベルタン」を「自分自身にしか忠実でない」人物として定義しているが²¹⁾、サドにおいては、前者を、感受性は万人が自然から授かっているものと見做し、その感受性を基盤に自分と他者が同一化できると考える人物、後者を自己の肯定がすなわち他者の否定であるとする人物と分類することも可能である。例えば、『新ジュスチーヌ』において、残忍な夫の犠牲者であ

るヴェルヌイユ夫人と出会ったジュスチヌは、夫人の「気持ちや不幸な境遇が自分とそっくりに思え」²⁾、夫人を救おうとするが、放蕩貴族ブレサックから「彼女とお前に何か共通するものがあるというのかね？ いったいどうしてお前は単純にも、そうやって在りもしない絆などでうちあげるのか、それがいつもお前の不幸の原因にしかないというのに？」³⁾ という非難を受ける。

さて、『アリーヌとヴァルクール』における「感受性の豊かな人々」も、他者の中に自分と同一のものを見いだそうとする点においてジュスチヌと同様である。そうすることによって、自らの感受性が描きだす世界が真実であるという保証を得ることができると考えているからである。例えば、「誠実な心」を持つブラモン夫人は「自分の美德が他人にもあると思うと、とても喜ばしい気持ちになる」⁴⁾。また、次に挙げるのはブラモン夫人の娘アリーヌが、妹レオノールの冷たい心を知った時の驚きを描写したものである。

この娘には、自分と同じようにやさしく繊細でないものすべてがひどく異様に (*gigantesque*) 思えるのでした⁵⁾。

この *gigantesque* という言葉はここにおいて *étranger* に近い意味で使われているが⁶⁾、この言葉が感受性にとって自らと異なるもの、すなわち異物の存在を的確に表現しているものと思われる。実際、心やさしい人々自身、自らの感受性が描きだす世界が、その外側にある *gigantesque* な世界に脅かされているということに気付いていないわけではない。以下はブラモン夫人の手紙からの引用である。

私にはそう考え、そう信じる必要があるのです。偽りの希望は不幸な者にとって子供の健康のために与えるアブサンの入った器の縁に塗った蜂蜜のように、その人を欺きますが、その誤った思い込みは心地よいものなのです⁷⁾。

時として、彼女は、このように感受性の与えてくれる甘美な考えが「偽りの希望 (*illusion*)」であることに気付きつつも、自分と異質のものを直視するよりも、自らと同一の心地よい誤謬の中に漂っていることを選ぶのだ。あるいはまた、ブラモン夫人を取り巻く心やさしい人々の間で、こうした誤謬が指摘されることもある。次に挙げるのは、先程言及した、他人の中に自分と同一のものを見いだそうとするブラモン夫人の様子を、彼女の仲間のデテルヴィルが描写したものである。

不幸な出来事に疲れ果てたブラモン夫人は目の前に差し出された偽りの希望に、藁をも掴むような思いで飛び付いた。彼女は暫しの休息を味わいたいのである。心の誠実な彼女は、自分の美德が他人にもあると思うと、とても喜ばしい気持ちになるのだ。彼女の愛する娘も彼女と同様だ。ふたりとも、この上なく甘美な希望に浸りきっているが、ユージェニーとて同じ気持ちだ。彼女も友達のアリーヌと同様、善良でやさしいからだ。疑ってかかっているのはサンヌヴァル夫人と僕だけだ、我々ふたりは本当に信じていないのだ⁸⁾。

ブラモン夫人たちほどは「善良でやさしく」ないデテルヴィルという人物は、同様に、親友ヴァルクールの場違いな「潔癖さ」⁹⁾を指摘し、感受性の豊かな人々の中であって、時として仲間の信じやすさに警告を与えはするが、このいささか懐疑的なデテルヴィルも、自分の懐疑心に従って行動することは決してなく、結局のところ、信じやすいブラモン夫人の遺言に従って、嫌がるアリーヌをブラモン法院長に自ら進んで引き渡してしまう。そうした一方で、彼は、レオノールやブラモン法院長の冷酷さに対して、やさしいブラモン夫人以上の驚きと憤りを見せる。実際、このデテルヴィルは物語の出来事を積極的に展開する人物というよりも、他の人物の言動を手紙で報告するという役割を担っている人物であるので、彼の懐疑心も出来事の在り方を変えるためのものではなく、他の人々の心やさしさ、信じやすさ、あるいは冷酷さ、おどましさを際立たせ、感受性が描きだす世界の危うさを強調するものでしかない。疑いを抱きつつ、彼もまた、ブラモン夫人と共に「偽りの希望」に流されてゆく。

しかし、たとえ感受性の描きだす世界が危ういものであっても、孤立無援で感受性とそれが描きだす世界を支えなければならないジュスチーヌと違い、『アリーヌとヴァルクール』における心やさしい人々にとって幸いなことは、彼らには感受性の描く世界を共有する仲間がいることである。予め同一の心を持つ人々の間で、やさしい言葉で自己と同一の世界を保証し合い、「誤った思い込み」の「心地よさ」を分かち合うことが、彼らの手紙の交換とも言える。実際、彼らは分かち合う〈partager〉という言葉を好んで使う。アリーヌは書く、「おお、ヴァルクール、あなたは私と苦しみを共にして下さいました……私の苦しみであなたの心は一杯になりました」¹⁰⁾。あるいはまた、デテルヴィルの手紙においては、「アリーヌ、私と一緒に喜んでちょうだい。あなたの妹を抱き締めてあげて」というブラモン夫人の言葉の引用に、「サンヌヴァル夫人とユージェニーと僕の涙が、この素晴らしい家族の涙とひとつに混ざり合いました」¹¹⁾という描写が続く。このように苦しみや喜びといった感情の共感によって、「心やさしき人」はほとんど常に感動状態にあり、ブラモン夫人はそれが「優しい心根、繊細な心」にとっての〈volupés〉であるとさえ言う¹²⁾。こうした共感のアンチテーゼとして、「感受性の全く欠如した」¹³⁾ 民族の国ビュチュアでは、王の相手をした女が快感を共にした場合は死刑に処

されるという話が語られている¹⁴⁾。

メルシエは、演劇は「他者の不幸を敏感に感じさせる理想的な手段」である主張する文脈の中で、「自分の外に身を置いて、他者の苦しみを共にするためには、不幸が語る言葉を習得しなければならない」¹⁵⁾と述べているが、サドにおいても、他者と共感によってひとつになれる人間は、他人の語る不幸な物語に熱心に耳を傾ける¹⁶⁾。これに対し、不幸な人の話を聞いても心を動かされることのない、レオノールの「冷静な」態度は、やさしさ溢れるブラモン夫人やデテルヴィルを憤慨させる¹⁷⁾。あるいはまた、リベルタンのブラモン法院長は不幸な人間の嘆きに対して一層冷酷である。彼は言う、「弱者はいつも嘆いているが、それが彼らの定めなのだ。われわれの定めは彼らの嘆きに耳を貸さないことだ」¹⁸⁾。

感受性の豊かな人間にとって、自己同一化は実在する他者との間のみならず、時として架空の人物、すなわち芝居の人物との間でも可能である。「感受性の豊かな人民」¹⁹⁾の国タモエにおいて、姦通をしている人妻が、舞台上演じられている不義密通の話を耐えられなくなって泣きながら席を立つというエピソードが語られる。そして「これが感受性豊かな国民に必要な唯一の懲罰なのです。これがもしフランスだったら、同じような罪を犯している婦人は平気で芝居見ているでしょうね」²⁰⁾という註釈が、君主ザメによって付け加えられる。実際、感受性さえあれば、自己と他者を隔てるあらゆる垣根が取り払われるがごとくである。架空の国の冒険談で語られる、ビュチュアという野蛮な国の民族は感受性などないはずであったが²¹⁾、夫から酷い仕打ちを受けているビュチュアの女をサンヴァルが救けてやると、彼の優しい気持ちはビュチュアの不幸な女にも通じたらしく、彼女は「感謝の涙で命の恩人の手を濡らす」²²⁾。さらに、感受性は時に身分の壁さえも取り除いて見せさえする。イザボーという貧しい百姓女はブラモン夫人の城館に招待され、その感受性によって共感し合い、「心暖まる情景」²³⁾を生じさせ、ブラモン夫人とサンヌヴァル夫人というふたりの貴婦人の間に座って同じテーブルで食事を食べる²⁴⁾。

それならば、感受性を拒む人間さえいなければ、「異物」の存在さえなければ、感受性によって、心やさしい人々の世界は果てしなく水のように拡がってゆくことが果たして可能なのであろうか。感受性の豊かな人々にとって不幸の原因、すなわち悪はリベルタンおよびリベルタンの世界だけであらうか。

2

この『アリーヌとヴァルクール』が、その出版事情と相俟って、公共性を担っており、いわゆるサド的閉域性の度合いが薄い作品であることは先に述べた通りであるが、匿名出版の

『ジュリエット物語』のサン・フォンや、巻紙に書かれた『ソドムの120日』のキュルヴァル法院長等多くの大リベルタンが、その金銭や権力によって、社会の法律や制度を超越している人物であるように、地理的に社会の法律や制度の届かない土地がサドの閉域である。ここではリベルタンの欲望が出来事の在り方を決定し、リベルタンの欲望に従って、リベルタン、犠牲者、快樂の助手等の身分区分がなされ、それがそのままひとつの社会を形成している。こうした閉域においてこそ、犯罪の遂行の具体的なありさまや犯罪哲学の推論を語る、言葉の豊饒なる噴出が可能になるのだ。一方、『アリーヌとヴァルクール』においては、単なる犯罪の場所、犯罪の指標としての閉ざされた場所はあるが、上記のような機能を持つ閉域はない。この作品においては、出来事のほとんどが法律や制度によって秩序づけられた世界の中で生起する。そしてこの法律や制度とは、サドが実際にその中で生きている法律や制度の延長上にあるものだと考えられる。というのも、彼が「革命の一年前にバスチーユ獄で書かれた」という副題でこの作品の時代性を強調していること、さらに作品内部においても時代設定が革命寸前であることを何度か言及していること、また、当時の婚姻制度や、乞食に対してとられていた当時の政策や植民地政策への批判を述べる人物たちの言葉等から、作者が、当時の社会のひとつの反映として作品世界の社会を設定してるものと思われるからである。そのため、ブラモン法院長の犯罪もブラモン夫人の善行も、すべては社会の制約を受けながら、その制度の中において実現されることになるのだ。

前章で、貴婦人の間で食事をする百姓女のエピソードを、感受性が身分の垣根を取り払う例として挙げたが、こうしたことが成立するのは、実生活から吹いてくる隙間風が入り込まない場合に限られるという保留をここで付けておかねばならない。善良な百姓女イザボーはそのやさしさと美徳ゆえにブラモン夫人から大層気に入られ、同じテーブルに並んで食事をした後、もっとゆっくりしてゆくよう勧められるが、彼女には「しなければならない家事があり、本人もとどまりたかったであろうが、そうするわけにはゆかず」¹⁾、そそくさとブラモン夫人の城を後にせざるを得ない。彼女は、有閑階級の貴婦人たちと共にいつまでも甘美な感動に浸っているわけにはゆかないのである。労働は「心暖まる情景」の限らない繰り返しを許さない。ガラニョンも指摘している通り²⁾、感受性溢れる手紙を長々と書いていられるのは貴族階級の特権であろう。リベルタンの犯罪も特権に支えられているものが多いが、感受性の交感を半永久的に続けていられるのも特権の賜である。

身分の差異はこのように生活のレベルのみならず、時に、より根本的なレベルで感受性の拡がりを限る。それが端的に現われるのが、ソフィーという娘に対する、心やさしい人々の態度においてである。ソフィーをブラモン夫人の攫われたもうひとりの娘だと思っていた当初、ブラモン夫人を取り巻く心やさしい人々は彼女をブラモン法院長の魔の手から守ってやりたいと

願っていた。しかし彼女が、実は、卑しく邪悪な百姓女（先のイザボーとは別人）の娘であることが判明すると、一同は冷ややかになる。アリーヌのやさしい恋人ヴァルクールは、ブラモン夫人にソフィーを見捨てるよう勧めながら次のように言う、「慎重な羊飼いは、逃げだした小羊を守ろうとして群れ全体を危険に晒すよりも、不幸にして、迷える小羊を犠牲にする場合もあるのです」³⁾。やさしさの最右翼であるブラモン夫人もソフィーが自分の娘でないことが判明した時、一度は「ソフィーが愛しい娘であることに変わりはありません。決して彼女を見捨てる気はありません」⁴⁾と言ったものの、状況が差し迫ってくると、「今やアリーヌやレオノールの方が」「百姓女の娘」である「ソフィーよりも大切です」⁵⁾と述べる。また、夫人の娘、「最もやさしい魂の持ち主」⁶⁾アリーヌは、「母がこの不幸な女性に寄せている関心はかつて自分の娘だと思っていた時と同じではありえません。二人の大切な本当の娘がいるのですから、もはや憐愍の情でしか結ばれていない人のために、自分の娘を犠牲にするわけには参りません、と母は申しております」⁷⁾と述べて、母親の心変わりを肯定している。ここで「二人の本当の娘」というのは夫人が長年育ててきたアリーヌと、出会って間もないが、生まれてすぐ攫われた娘であることが判明したレオノールのことである。母親譲りのやさしいアリーヌに比べ、レオノールが、夫人が愛してもいない⁸⁾夫、ブラモン法院長とそっくりの冷酷無慈悲な魂の持ち主であることは、夫人自身が認めるところである⁹⁾。一方、ソフィーは百姓の娘とはいえ、それが判明するまでは、アリーヌやブラモン夫人と共に感動の涙を流した間柄であり¹⁰⁾、またアリーヌとは姿も心も瓜二つだと言われ、デテルヴィルは、「この二人の若い女性がまるで血族のようによく似通っているということに気付かずにはいられません」¹¹⁾と述べていたほどであった。気立ての悪い実子と気立ての良い他人の方とどちらが大切かということが問題なのではない。ただ、百姓の娘であることが判明するまでこの貴族のグループが彼女に寄せていたやさしい気持ち、真実の判明と共に霧散してしまう心の変化、「憐愍の情でしか結ばれていない」というという表現で彼女との結びつきを断ち切ってしまうとする感受性の低下に注目したいのである。しかも「憐愍の情」、すなわち、「他人の苦痛を自分の苦しみと感ずる気持ち」¹²⁾、「他人の苦しむ様を見て、痛ましさに心を動かされ、苦しみが和らぐよう願う利他的感情」¹³⁾は、感受性の最も大切な表れであるはずなのに、「憐愍の情でしか」という否定的な価値が与えられている。この「憐愍の情」という絆を断ち切るものは親子の絆、家族の絆であり、さらにもうひとつ、明言されていないものの、ソフィーの同格として何度も繰り返される「百姓女の娘」という表現から予想されるように、身分の差異である。

ガラニョンは、この作品の封建貴族たちが、感受性を、自らの立場の正当性を保証するためのひとつのイデオロギーとし、感受性によって民衆と結びつくことでブルジョアに対抗しようとしているという、大変興味深い指摘をしているが¹⁴⁾、ソフィーの例からも想像されるよう

に、封建貴族同士の間に見られる感受性の交感と、封建貴族と民衆の間のそれが同一のものであるとはもはや考えられない。ブラモン法院長に嫁いだブラモン夫人は、持参金こそ少ないが、由緒正しき封建貴族の出である。彼女は、娘アリーヌの婿として、夫の友人で容姿も品行も悪い、金持ちの徴税官ドルブールではなく、貧乏だが、「家柄は」彼女より「良い」¹⁵⁾ ヴァルクールを望んでおり、また古くからの友であり、恋人であったとも噂されるボーレ伯爵を讀めるにあたって、「旧き善き時代の騎士道の紛れもない美德を見せてくれる」¹⁶⁾ 人物である表現する。このブラモン夫人の楽しみは施しをすることであり、施しは彼女にとって、単に「物乞いをする人の求めに心を動かされ、その人を救ってあげることがやさしい喜びが味わえる」¹⁷⁾ という心の問題のみならず、「私たちの富は貧しい人のための財産なのです。不幸な人の窮乏を助けてあげる楽しみを知らない者は、自分が何故他の人より裕福に生まれついたのかという真の理由も、人生の最も甘美の魅力も、分からずに生きたことになります」¹⁸⁾ という身分の問題でもある。彼女にとって、富を少しばかり分け与える (partager) ことで得られる施しの「楽しみ」とは、与えられる者と感動を分かち合う (partager) ことのみならず、与えられる者とは絶対に分かち合えないもの、すなわち特権を顕在化させることにあるのだ。ここにおいて私たちは、「貴族にとっての富は自らの高貴さを公然と示し、自らの身分によって与えられる楽しみを手に入れるためのひとつの手段に過ぎない」¹⁹⁾ というモーズィの言葉を想起せずにはおれない。感受性は何よりも先ず感覚の問題であるから、「肉体を通して経験される」²⁰⁾ ものであるが、肉体は、少なくとも「物乞い」の場面におけるブラモン夫人の肉体は、感受性によって貫かれる前に、すでに制度によって貫かれているのである。

3

制度はこのように感受性を、いわばその内側から方向づけするのみならず、時として、制度に奉仕するものとして利用する。

サドは作中にふたつの架空の国における冒険談を挿入しているが、ユートピア探検というのは当時流行のテーマであり、そこではやはり流行のテーマである「善良な未開人」の国として、感受性の豊かな国民の住む国と、そのアンチテーゼとして感受性のまったく欠如した国民の住む国が紹介されている。

前者の感受性の豊かな国民の国タモエにおいては、国民が自らの感受性によって制度に完全に従わされている。第一章でこのタモエにおいて、愛人のいる人妻が演劇を観て、悔い改めるエピソードを引用したが、「これが感受性の豊かな国民に必要な唯一の懲罰なのです」というタモエの君主ザメの言葉を再び思い起したい。ここでは文字通り、感受性が懲罰のために利用

されており、この感受性ゆえに、この人妻はやはり感受性ゆえに芽生えたのかもしれない愛を捨てて、結婚という制度の中に戻ってゆくのである。

結婚というのは、法による拘束の少ないことを誇るタモエにおける数少ない制度のひとつであり、子供は国家で養育するので、いわゆる家族という単位はなく、夫婦が日常生活の集団として唯一の単位になっている。「国家が国全体の唯一の所有者であり、人民は使用収益者にすぎない」¹⁾ この国では、婚姻の絆は両者の愛情だけだとザメは自慢げに言う、「すべての娘が平等に裕福であり、すべての青年が同じ資産の分け前を所有しているならば、お互い選び合うのに、自分たちの心に従いさえすればよいのです」²⁾。確かに、結婚を成立させるには「心」さえあれば充分のようであるが、しかし一度結婚してしまうと、それを維持できるか否かはもはや「心」や「愛」の問題ではないのである。そのことは、すでに結婚の誓い（「ふたりが愛し合ってゆくこと、子供をつくるよう協力して努めること（……）」³⁾）からも窺えるが、離婚の条件においてより明確に示されている。

夫は次の3つの理由で離婚を要求することが出来ます。妻が病弱な場合、妻が子供を生みたがらない、あるいはもう生めない場合、妻が気難しく、夫が妻に正当に要求できるものを妻がすべて拒んでいることが証明されている場合です。また妻の方からも、夫が病弱な場合、妻がまだ子供を生めるのに、夫が子供を生ませたがらない、あるいはもう生ませることができない場合、それから、いかなる理由であろうと夫が妻を虐待する場合、夫との離別を要求することができます⁴⁾。

要は子供を作れるか否かである。健康である限りは、すべての国民が何らかの労働に携わらねばならないこの国において、結婚は、そのきっかけが何であれ、ひたすら生産性を目標とした制度となっているのだ。より生産性を高めるためであれば、男はふたりの妻を持つことも可能である。

自然が、女性たちに種の生産のための期間をわずかしか与えていないことは、男性がふたりの妻を持つことを自然が許しているのだと示しているように思われます。妻が子供を生めなくなってからも、夫の方はまだ15年か20年は子供を作ることが望めますし、子供を作るという可能性を楽しむことができます。従って、夫がふたり目の妻を娶ることを許す法規は彼の正当な欲望を支持するものに他なりません⁵⁾。

要するに男も女も、種馬のように「種の生産」に携わらねばならず、「愛情」はその義務に就

くためのイニシエーションに過ぎない。「いつも慎み深さと上品さが漲っている」⁶⁾ タモエについての描写の中に、「これほど並はずれて大きい男性性器がみられる国は世界中どこにもない」⁷⁾ という説明がわざわざ挟まれているのも、男たちの生産力を強調するためであり、それが彼らの役割の象徴だからであろう。「完全な平等」を標榜するこの国において、この機能を果たしている限りはなるほど平等であるが、そうでない場合は町外れの小さな家に住まねばならない。

この国のすべての町の外れには、夫婦用の家よりも小さい家ばかりが並んでいる通りがあります。これらの家は国家によって、男女の離婚者や独身者に与えられていました⁸⁾。

結婚を拒否する男たちにはこうした地理的差別に加えて、さらに、より苛酷な労働が課せられている。

(……) 私は独身者たちに労働力で国家に奉仕するという労だけを課していますが、それは子供を差し出すことで国家に奉仕することが彼らにはできないからです。(……) あなたもご存じのように (……) 一般に、国家に欠かすことのできない骨の折れる仕事はすべて皆、彼らに任されています⁹⁾。

「愛」によって結婚した者には「種の生産」の義務が、「愛」を拒否した者には苦役の義務が、こうして課せられるわけであるが、実際、この「感受性の豊かな」国民たちがその感受性によって制度にしっかりと組み込まれてゆくシステムを、君主ザメは次のように説明している。

「私は愛情と思いやりの大きな力を借りて、彼らの心をこの原理（幸福は美徳によって守られるものであるから、姦通は不幸の原因となる悪であるという原理：註・宮本）で動かしてきました。(……) この青年たちにとって、私の家に出入りを許されるほど喜ばしく、また誇らしいことはありません。私はこの弱点を掴み利用したのです。人を導こうというつもりなら、考察すべきすべては人の心にあります。(……) この青年たちのひとりが」とザメは続けました、「(夫としての) 義務を怠るようなことがあったならば、彼は私の家から締め出されていたでしょう。そうした心配が彼らの行動（不義密通）を抑制しているのですが、それも私が彼らに愛されるすべを知っていたからこそ一層効果があるので。私に嫌われるのを彼らはぞっとするほど恐れているでしょうから」¹⁰⁾。

「愛情」や「思いやり」の心があるからこそ、タモエの人々は君主に従い、「種の生産」を守るための「結婚」という制度の軛に自ら繋がれているのである。そしてこの制度の遵守が自給自足のこの国を繁栄させ、文化の低い、生産力も怠る近隣の島々に産物を分け与えるほどにこの国を豊かにしているのである。

一方、「感受性の全く欠如した」国民たちのビュチュアでは、「弱者を強者に服従させ、専制主義を維持することのみを目的とした」¹¹⁾ 法律によって制度が作られているため、女と民衆は徹底的に搾取され、「思いやり」の心など無いこの国においては、女も民衆も様々の理由で簡単に殺される。これに加えて、迷信によって性活動に対し定められている理不尽な規制、さらに妊娠と出産に対する虐待が、「滅亡寸前」¹²⁾ にまでこの国の人口を激減させている。ところで、ビュチュアの国民について、「感受性というものが全く欠如しているこの国の野蛮人は(……) 親や友達の死を悲しむことがあるなどとは思ってもみず」、死者に敬意を払うこともない¹³⁾ という記述、また、「彼らは明日のことには無頓着で、気にもかけず、できる限り現在を享楽し、過去を思い出したり、未来を予想したりすることが決してない」¹⁴⁾ という記述もあるが、こうしたことは、感受性が無いが故に「自分の外に身を置いて」¹⁵⁾ 考えることがなく、従って自分以外の同胞の命に対する思いやりがないことや、生まれてくる命を虐待することと通底しているものと思われる。つまり感受性のない人間にとっては、今ここにいる自分だけが問題であり、他者も「後世の人間もないに等しい」¹⁶⁾ のである。そしてまさにこのことが、国家の生産性を守るための制度の出現を不可能にし、「人口を激減させ」、国家を「滅亡寸前」に追い込んでいくのだ。

ここにおいて私たちは、感受性と制度、および生産力の結びつきをポジティブに表現しているのがタモエの島であり、ネガティブに表現しているのがビュチュアの国だということができる。そしてさらに、感受性というものは、利他主義および博愛主義を通して、同胞としての連続性、種の連続性、すなわち人類としての連続性を保証するものであるが故に、時として、個人的というよりはむしろ社会的なものでありうるのだということを、このふたつの架空の国が描き出しているのだといえよう。

4

ところで、架空の国タモエにおいては、心、すなわち感受性の問題である恋愛は、そのまま何の障害もなく結婚という制度に直結したが、これは単に経済的平等が徹底しているからだけではなく、子供を国家で養育するために親権、家父長権というものが無いからであった。ところが、親権、とりわけ父権の強い社会においては、父親と子、制度と個は自ずと対立関係をな

し、それが恋愛を通して顕在化される。

アリーヌは貧しいヴァルクールと恋仲であるが、父親のブラモン法院長から金持ちの徴税官ドルブールとの結婚を迫られる。もちろん、身分や財産のための結婚を強要する父、あるいは同じ動機から子の恋愛に反対する父というのは、取り立てて珍しいテーマではない。ジュリの父は平民であるサン＝ブルーとの結婚を許さず、デグリュエの父もマノンのような女との結婚には反対であった。この『アリーヌとヴァルクール』において、登場人物たちが何度か観に行く芝居がディドロの『家長』であることは偶然ではあるまい。ソブール監修の『フランス革命歴史辞典』の「家族」の章を見ると、副題として（結婚～離婚～養子縁組～父権）という一連の言葉が並べられており、革命期から執政時代の家族制度の変化を通して父権が強大になってゆく過程が説明されている¹⁾。また、エンゲルスは「一夫一婦婚家族、(……)それはだれが父親かについて議論の余地のない子どもたちを生ませるというはっきりとした目的で、男の支配のうえにきずかれている」と述べ、さらに「一夫一婦婚は、けっして個人的性愛の果実ではなく、それとは絶対に無関係であった」として婚姻の打算性を強調し、この一夫一婦制の完成としてナポレオン法典を引用している。また彼は、「一夫一婦婚は(……)女にとってだけ一夫一婦制で、男にとってはそうではない」と述べ、これを「一方の性(男性)による他方の性(女性)の隷属化」であると断言している²⁾。こうした点から、私たちは歴史において確認されている事象の反映を18世紀小説の中に見ているのだとも言えよう。

実際、ブラモン法院長は父として夫として、妻と娘に絶大な権力を揮っている。アリーヌは恋人ヴァルクールに言う。

父は主人として命じたのです。私は従わなければなりません。結婚相手が現われました。父のお眼鏡に叶っているのです、有無を言わせません。私の同意など要りません。父が従うのは自分の利益です。私の気持ちはすべて、父の気紛れの犠牲にしなければならないのです³⁾。

アリーヌにとって父ブラモン法院長は文字通り主人として命令する父であり、彼女の心は父権の犠牲へと差し出されている。また、ブラモン夫人は、そうすればアリーヌを救えるかもしれないのに、いざとなると次のように言って、夫ブラモン法院長の犯罪を明るみに出すことを拒む。

あなたの大切なアリーヌの父の名譽を汚すことが、あなたにはできますか。夫の名を傷つけることが私にできましょうか⁴⁾。

彼女にとってブラモン法院長は愛することのできない男である前に、夫であり、アリーヌの父であるのだ。さらに、このブラモン夫人が今際のきわにアリーヌに与える「最後の忠告」は「お父さまに従いなさい、そしてお父さまのお決めた方々に、盲目的に身を捧げるのです」⁵⁾ というものである。ブラモン夫人自身、父が彼女をブラモンと結婚させたことが自分の不幸の始まりだと嘆いていた⁶⁾ にも拘らず、妻として夫に従い、母として娘を父に従わせること、さらに夫となる人に従わせることを最後に選ぶのだ。心やさしいブラモン夫人やアリーヌの感受性は、一時的に、彼女たちを個人として、父権と対立させるが、本来、感受性は「自らの上にある秩序と折り合おうとし、最後には最も伝統的はキリスト教的美德と諦念に屈服してしまう」⁷⁾ ものであるから、結局のところ、父権の命ずる妻の美德、娘の美德に自ら進んで犠牲になってしまうのである。感受性は恋愛の基盤であると同時に、父権に対する従順さの根拠にもなっているのだ。

ブラモン法院長に限らず、『アリーヌとヴァルクール』に登場するほとんどすべての父親が、娘や息子の恋愛に異議を唱え、家長の名のもとに利益のための結婚を押しつけようとする。「心」だけに基づいた結婚を主張しているザメさえも、自分に息子に対しては家長として振る舞っている。すなわち彼は、優秀な製造業者の功績に報いるために、その娘ジリアと嫌がる自分の息子を無理遣い結婚させたのであった。要するに、結婚は完全に父権に属するものであり、父親はひたすら利益のためにこれを取り結ぶのである。そして、利益とはタモエのような所有財産制のない国においては、国家の生産力であるが、フランスを中心とする金本位制の所有財産の確立した国家においては、金銭を意味している。『新エロイズ』や『マノン・レスコー』においては金銭よりもむしろ身分であったが、この『アリーヌとヴァルクール』の父親たちの論理を支えるのは、何よりも先ず金銭であり、これを根拠に彼らは恋愛を否定する。次に挙げるのは、貧しいが娘と相思相愛の仲であるヴァルクールと娘の結婚を願うブラモン夫人に対して異義を申し立て、自分の友人で金持ちのドルブールを婿にしようというブラモン法院長の主張である。

ドルブールはわしの25年以來の友人であるし、十萬エキュの年金を受けている。おまえの言う、あの男（ヴァルクール）の愚にもつかぬ魅力が、これだけの力を持った相手に太刀打ちできるとでも思うのか。今日々、愛のために結婚する者などいるものか。結婚するのは利益のためだよ。利益だけが婚姻の絆を結び合わせる唯一の法則だ。そうとも、金さえあれば、愛し合っていようが、いるまいが、構うものか。愛で世間に対し箔が付くとでも思っているのか。いや、財産で箔が付くのだ。箔なしに生きてゆくことはできないぞ⁸⁾。

ブラモン法院長にとっての金銭は「力」であり、「世間」に対する「箔」であり、「生きてゆく」ために必要なものである。ここでモーゼイのブルジョワにとっての富の定義⁹⁾を引用するまでもなく、ブラモン法院長にとっての金銭はそのまま、ブルジョワにとっての実人生の価値であろう。「生きてゆくこと」という彼らにとっては有無を言わさぬ論理で恋愛を打ち砕く。同じ文脈で愛と金銭を対立させるのは、冒険談の語り手のひとりサンヴィルの父である。彼はレオノールとの結婚を望んでいるサンヴィルに、利益のための縁談を勧めながら次のように述べる。

息子よ、わしの言うことを信じなさい、こうしたこと（父親の勧める縁談に伴う利益）は愛などという屁理屈すべてよりも価値があるのだぞ。人はいつも生きてゆかねばならないが、恋は一瞬限りのものだ¹⁰⁾。

サンヴィルの父はブルジョワではなく封建貴族であるが、ここにおいて、サドは、身分制度を超えて、金銭と父権という強大になりゆくふたつの力を無力な感受性と対峙させているものと思われる。父権はこのように、ほとんどの場合、生きてゆくための金銭という論理と結託し、その正当性を主張するのである。

ところで、この作品において、実際の父親の他に、若い登場人物の味方になり守ってくれる父親のような人物像も少なくない。次の引用は、サンヴァルという若者との決闘直後のヴァルクールについて、彼自身が一人称体で語ったものである。

私の取り乱した様子、血で汚れた衣服、死んだ男と疑いの余地のない関係、サンヴァルの遺体から発見された手紙、その手紙で彼の父が世界の果てまでも私を探しに行くように彼に命じていたこと、こうした事柄のすべてから、当時リヨンで指揮をとっていた***氏は、慎重かつ厳格に対処しなければならないと判断した。

「君の起こした事件がいかに由々しいものであれ」と、この軍人は、それでも丁寧な口調で私に告げた、「君に対しては、私自身の息子にしてやるように振る舞うつもりだ。（……）すべての事態は、私が細心の注意を払って收拾しよう。（……）しかし安心したまえ。私は何としてでも、すべてを揉み消すつもりだ。君が、早く自由になれることを祈っている」¹¹⁾。

ここにふたつの父親像が端的に現わされているものと思われる。すなわち、自分の息子に「地の果てまでも」復讐に行くよう命じ、死に至らしめてしまう横暴な父。もう一方は、「息子に

してやるように振る舞い」、「安心」させようとする父である。アリーヌの父同様、前者の実父は「主人として命ずる」父であり、後者の父親代わりは感受性が描くところの「慈父」¹²⁾である。命ずる父と守ってくれる父、制度と感受性、現実と感受性が描きだす世界、この一見したところ両極のように思われるふたつの父親像の間に、若者にとっての出来事が展開されている。

しかしながら、ここで見落としてはならないのは、こうした父親代わりの人物が多くの場合、金銭を差し出すことである。上に挙げたりヨンの司令官***氏も、ヴァルクールの身柄を自由にしてやる時に、「後はもう、君に私の財布をあげるだけだ。自分のものだと思って使いなさい」¹³⁾と言いながら、財布を差し出す。つまり、彼ら父親代わりたちは、血のつながっていない若者に「息子よ」と呼び掛け、実父に見られないやさしさを示すが、大抵、心と一緒に金銭を与えるのである。タモエの君主ザメも、遭難したサンヴィルを救い、人生のアドヴァイスを与えた後、サンヴィルを「我が息子」と呼びながら金塊を差し出す。そして、金はいらないから「心だけを下さい」と言うサンヴィルに、ザメは「金と心、両方お取りなさい」と答えるのだ¹⁴⁾。感受性が描きだす父親たちは、こうして金銭と心に折り合いをつけることを若者に教え、さらに金銭の論理に若者を導こうとしているのだとも言えよう。次の引用はザメからもらった金塊を値踏みするサンヴィルを彼自身の一人称体の語りで描写したものである。

あの金塊、ザメの友情の貴重な結晶の入った箱に目を向け、この宝を見詰めていると、感謝の涙が溢れてきました。(……) 私はまだ、箱の中身を出してみたことはありませんでしたので、金塊の値打ちを数えるために箱から出しました。そして値踏みをしようとした時に、箱の底に一枚の紙を見つけましたが、その紙には見積もりが書かれてあり、私はフランスの貨幣に直して、757万リーヴルの金を所有しているのだということが分かりました。

「おお！」と私は心の中で叫びました、「これで私はヨーロッパの金持ちだ。ああ、お父さん！ あなたの老後を慰めてあげることができますよ。あなたに与えた損害を償うこともできます。あなたを幸せにしてあげられれば、私もどんなに嬉しいことか！ そしておまえ、私がそのひとから愛されたいと願う、ただひとりの愛しいひと、おお、レオノール、いつの日かまたおまえに会えることを天が許してくれたなら、ここに、私の結婚のつましい贈り物を立派なものにしてくれるだけのものがある、おまえの望みをすべてかなえてやるだけのものがある、おまえが欲しがる前に叶えてやる魔法の力を私に与えてくれるだけのものがある！ しかし、運命の気紛を考慮していない人間の胸算用は、何と当てにならないものでしょうか」¹⁵⁾。

ここにおいて、金塊は「ザメの友情の貴重な結晶」と同格である。話者サンヴィルはこの「ザ

メの友情」,つまりザメの心に感じ入って「感謝の涙」を流すのである。しかしこの「友情」は「値打ちを数え」られ、「フランス紙幣」に換算されてゆく。そして通貨に直された「友情」はサンヴィルに、実父との和解と、愛するレオノールとの幸せな結婚の双方を夢見させる。つまり、友情の値踏みが金塊の価値の見積もりになり、それが父権と恋愛に折り合いをつけるという胸算用に至るわけである。ザメの「心だけ」を貰ったのであれば、通貨に換算できない友情だけを貰ったのであれば、こうした胸算用は一切不可能であったはずだ。なお、「当てにならない」と、ここで言っているのは、それがすぐに実現しなかったという意味であり、紆余曲折を経るものの、金塊は彼の胸算用を決して裏切らない。結局彼は、この金塊のお陰で幸せになるのだと言ってよい。

こうして若者にはやがて父親になるためのイニシエーションが与えられているわけである。一方、娘の方は、妻としての隷属性へのイニシエーションを父と母の両方から与えられる。先程、ブラモン夫人が娘のアリーヌに夫となる人に盲目的に身を捧げるようにという遺言を残したのは見たばかりであるが、この点についてはブラモン法院長もまったく同意見である。彼はアリーヌのことから女性一般に敷衍しながら、恋愛を否定し、金銭のための結婚を主張し、次のような表現で結論を下す。

ドリブールはアリーヌの心を得ようなどとは思っておらん、心には手をつけず彼女の好きなように放っておいてくれるだろうよ (……)。彼はアリーヌの愛情など欲しいとも思っておらんよ、彼女と結婚する、ただそれだけのことだ。誰も、おまえさんがひけらかす、あの滑稽極まる騎士道精神など婚姻に必要だとは思っておらん。女と結婚するのは、自分の知人友人のためであり、財産のためであり、時にはその女で欲求を満たすためだ。だから、喜んでであろうが嫌々であろうが、妻は夫に対する服従の義務を果たさねばならない、彼女は盲目的に従わねばならないのだ。彼女が愛していようが、いるまいが、要求に応えることを喜ぼうが、悲しもうが、それが正当な要求であろうがなかろうが、女をものにしてしまえば、あとはいったい何が幸福に役立つというのだ。ご大層な愛情をお持ちのおまえさん方は、空論が生む妄想を至福だとおっしゃるが、そんなものはおまえさんたちのからっぽの脳味噌の中にしかないのだよ。(……) 女を愉しみさえできるなら、女の愛などいったい何の役に立つのか教えて欲しいものだね。女を愉しむその時に、その愛とやらは肉体の快感以上のものを与えてくれるのかね?¹⁶⁾

ここで残忍な父親ブラモン法院長とやさしい母ブラモン夫人の言葉が、「妻は夫に盲目的に従わねばならない」という点において、完全な一致を見せている点に注目したい。「女の身体と

金さえ手に入れば、心などどうでもよい」¹⁷⁾と断言して憚らない法院長の結婚観と、「愛し合う幸福」¹⁸⁾を賛美して止まなかった夫人の娘への遺言が結論において食い違わないのである。エンゲルスが告発する一夫一婦婚における女性の隷属性がこの作品においては、父と母の双方から、あるいは権力と感受性の両方から、娘に押しつけられているのである。

ジャン・エラルは『アリーヌとヴァルクール』について、性差別がいかに根深く作品世界に浸透しているかという、示唆に富んだ論文を著しているが¹⁹⁾、性差別という現象自体は当時の社会現象の反映に過ぎない。拙論『女はいかにして言葉を奪われたか』²⁰⁾において、私は、革命期のジャーナリズムの文章がいかに男性中心主義のイデオロギーによって浸透されているかを指摘したが、同じような指摘は当然フィクションのジャンルにおいても可能であろう。『アリーヌとヴァルクール』における性差別の中に、サド独自のものがあるとするならば、それが金銭を唯一の価値とする父権と、愛情を美德とする感受性との、いわば共犯によって実現されていること、それも表現を同じくするなどして、それが殊更顕著に感じられるようにサドが書いていることである。

例えば、「心」で配偶者を選ぶことを最良の選択とし、感受性をひとつの美德と見做しているザメであるが、ここで、3章で引用した離婚成立の条件を再び思い起こしたい。その中で、「夫が妻に正当に要求 (légitimement demander) できるもの」という表現を使っていることに注目したい。あるいは同じく3章で引用した、夫が二人目の妻を迎えるための条件において、「正当な欲求」という表現を使っていることに注目したい。同じ表現が上に挙げたブラモン法院長の攻撃的な言辞の中に見つけられる。「感受性の豊かな国民」の国の君主であるザメは、残忍なブラモン法院長と同じ表現を使って妻の務めを述べているのである。さらにまた、ザメは、学校において、男子生徒には適性と好みに応じた教育をさせているが²¹⁾、女子生徒には一様に「針仕事」²²⁾をさせている。一方、ブラモン法院長は、自分の娘であると信じているソフィーの教育に関してイザボーに「縫い物だ、縫い物と字を読むこと (……) 女の子の必要なのはこれだけだ」²³⁾と言っている。性差別の言辞において共通点を見せているのは、冷酷なブラモン法院長と「善良な」²⁴⁾ザメだけではない。「暴君」²⁵⁾のようなドルブールと心やさしいブラモン夫人も女性の浮気に関して、よく似た表現を使っている。妾のソフィーが浮気をしていると勘違いしたドルブールは、彼女に「厳しく罰してやるからな」²⁶⁾と言う。一方、妻の浮気から家族中が不幸になったという物語を聞いたブラモン夫人は、「法律が男性の過ちよりも女性の過ちを厳しく罰するのにも、もう驚きませんわ」²⁷⁾という感想を洩らす。

ここにおいて私たちは、サドが描くところの感受性が父権の強さを際立たせこそすれ、決して父権の外にあるものではないということを確信する。父権の力から逃れること、それは感受性の外に出ることに他ならない。この作品の幕を引くのは、「夫と幸せに暮らしている」²⁸⁾ク

レマンチヌとレオノールの、女性ふたりとなっているが、彼女たちが幸せを掴んだのは、エラルが言う意味での「解放された (émancipée)」(進歩的な、という漠然とした意味でエラルは使っており、何から解放されているのか明確にしていない) 女性であるからではない。彼女たちが幸せなのは、先ず、(émancipée) という言葉本来の意味で、父権から解放されているからであり、同時に、感受性からも解放されているからである。

まずクレマンチヌというのは父親の分からない私生児であり、母親もすでに死亡している。彼女にとって、「美德という言葉はいかなる観念も表わさず」、「愛という言葉は妄想でしかなく」、「彼女に言わせれば、愛などという感情は昔の小説にしかあり得ない」のである。さらにまた、「あらゆる絆、あらゆる義務が彼女の目には無に等しく、善良さは彼女によれば、瞞着に過ぎず、感受性は、陥らないように心しなければならぬ弱さに他ならない」のである²⁹⁾。

一方、レオノールは本当はブラモン法院長とブラモン夫人の間に生まれた、もうひとりの娘であったが、すり替えられ、エリザベート・ケルヌイユとして育てられ、育ての親ケルヌイユ氏はすでに死亡、ケルヌイユ夫人もレオノールが駈け落ちしている間に亡くなっている。また、実父ブラモン法院長が百姓女の娘ソフィーを娘だと思い込んでいたために、レオノールは法院長の手から免れており、彼女にとっても父権というものは事実上存在しない。しかも彼女はサンヴィルとの駈け落ちに際し、聖女の像に化け、尼僧たちを欺いて修道院を抜け出し、旅籠や偶然居合わせたサンヴィルの「父の目の前を」、ふたりで変装し「厚かましくも通り抜ける」³⁰⁾のである。つまり、これは感受性が従うところの教権と父権をふたつながら踏み躪ることのイニシエーションと考えてよいだろう。

また、彼女の感受性のなさに関しては、自他の証言の数の多さに枚挙のいとまがないほどである。ブラモン夫人にいわせれば彼女の「心の冷たさ」は法院長そっくり³¹⁾であり、テデルヴィルは、「冷ややかに」、「冷淡に」³²⁾、「真実の気持ちからというより、銜いから」³³⁾といった表現で彼女の言動を形容する。実際、彼女が優秀な女優であったというのは決して偶然ではない。彼女にとって、通常の意味での感受性は演じるものであれこそすれ、それによって自らが動かされるようなものではなく、男を動かすための道具に過ぎない。次に挙げるのは、逃亡の手伝いをさせるために、ひとりの男を騙す場面である。

彼の心が私への愛情を抱いているのが分かるとすぐ、(……) 私は彼に感謝の気持ちを伝えました。とても熱をこめて語ったので、私の言葉は彼の心の琴線に触れ、まもなく彼の心に愛を燃え上がらせました。ドルシーニが私に夢中になったことが分かったので、彼が恋を語るのを聞いてやりました。私も彼を憎からず思っているのだと信じ込ませるために、できることは何でもいたしました³⁴⁾。

この哀れな恋人は、結局、彼女から何の報酬も受けることなく彼女のために死んで行く。彼女の旅は、実際は有りもしない感受性を演じてみせることで、男たちに愛、あるいは愛への期待を抱かせては、何ひとつ与えることなしに逃げだすというパターンの連続である。男たちに与えるのは約束だけであり、彼らのいかなる「正当な要求」にも、彼女は決して譲らない。ブラモン夫人はレオノールのこうした態度を評して、「身の汚れなさを守るための何か人間の力を超えたもの」³⁵⁾と呼んでいるが、レオノールが死守してきたのは「身の汚れなさ」ではなく、男たちの欲求に応えない権利であり、それはすなわち、父権と感受性の外に在ることの証に他ならない。ブラモン夫人にとって、父権と感受性の外に出るということは、まさに「人間の力を超え」ることなのである。

この「だれが父親かについて議論の余地の」³⁶⁾あるふたりの女性、とりわけレオノールの言動は、他の女性登場人物たちの置かれている不平等の帳尻をあわせるがごとくであるが、この女性側の勝利が私たちの関心を惹くのは、それが父権と感受性から逸脱することによって実践されているという、ただこの一点においてである。なぜなら、「解放された」自由な人間となるために、感受性を捨てなければならないという、まさにこのことが、同時期に著された他の長編小説において、リベルタンたちが繰り返し語り、繰り返し実行し、書いているサドが繰り返し述べていることだからである。

制度やイデオロギーに浸透された感受性、文化がこれまで書いてきた感受性、それを白紙に戻すことこそがリベルタンの永遠の犯罪であり、サドの絶えざるエクリチュールなのである。

註

0

- 1) Sade, D. A. F., *Aline et Valcour ou le Roman philosophique*, *Œuvres I*, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 1990. (以下、Oとする)
- 2) この頭文字だけで誰であるかは、当時の人々にとっては明白であつたらしい。またサドは、1800年出版の短篇集『恋の罪』(*Les Crimes de l'amour, nouvelles héroïques et tragiques*)の冒頭に載せた、論文『小説論』(*Une Idée sur les romans*)において、自分が『アリーヌとヴァルクール』の著者であることを公言する一方、『ジュスチヌ』の著者であることは否認している。
- 3) *Supplément. Lettres et mélanges littéraires*, éd. G. Daumas et G. Lely, Borderie, 1980, pp. 102-105.
- 4) O, p. 1123.
- 5) *Les Cent Vingt Jours de Sodome ou l'École du libertinage*, *Œuvres I*.
- 6) *Justine ou les Malheurs de la vertu*, *Œuvres Complètes*, Cercle du Livre Précieux, Paris, 1966, t III.
- 7) *La Philosophie dans le boudoir ou les Instituteurs immoraux*, Collection Folio, éd. Gallimard, 1976. (以下Pとする)
- 8) *La Nouvelle Justine ou les Malheurs de la vertu suivie de l'Histoire de Juliette, sa sœur ou les Prospérités du vice*, OC, Cercle du Livre Précieux, Paris, 1966, t V, VI, VII, VIII, IX.
- 9) P, p. 180.
- 10) O, p. 436, p. 1086, etc.

- 11) 『ジュスチーン物語の3つテキストについて』, 立教大学紀要, 〈立教大学フランス文学〉, 1981年, 79頁~91頁。
- 12) Gérard Genette, *Figures III*, Éditions du Seuil, Paris, 1972.
- 13) *O*, p. 437.
- 14) Pierre Trahard, *La Sensibilité révolutionnaire* (1789-1794), Slatkine Reprints, Genève, 1968, p. 30.
- 15) *Précis de Littérature française du XVIIIe siècle*, sous la direction de Robert Mauzi, PUF, Paris, 1990, p. 130.
- 16) *O*, p. 416.
- 17) *O*, p. 973.
- 18) *O*, p. 1016.
- 19) Michel Delon, *L'Idée d'énergie au tournant des lumières (1770-1820)*, PUF, Paris, (以下 *I* とする), p. 447.
- 20) *O*, p. 824.

1

- 1) *I*, p. 446.
- 2) *OC*, t VII, p. 137.
- 3) *OC*, t VII, p. 166.
- 4) *O*, p. 487.
- 5) *O*, p. 968.
- 6) *O*, p. 1335.
- 7) *O*, p. 506.
- 8) *O*, p. 487.
- 9) *O*, p. 731.
- 10) *O*, p. 511.
- 11) *O*, p. 466.
- 12) *O*, p. 505.
- 13) *O*, p. 596.
- 14) *O*, p. 565.
- 15) *I*, p. 333 からの引用, 原典は Mercier, *Fictions morales*, Paris, 1792, I, p. 137 et *Du Théâtre*, p. 4.
- 16) *O*, p. 826. etc.,
- 17) *O*, p. 963.
- 18) *O*, p. 975.
- 19) *O*, p. 700.
- 20) *O*, p. 689.
- 21) *O*, p. 596.
- 22) *O*, p. 601.
- 23) *O*, p. 452.
- 24) *O*, p. 455.

2

- 1) *O*, p. 455.
- 2) Jean Garagnon, La sensibilité comme idéologie de substitution de la noblesse dans *«Aline et Valcour»*, *Études sur le XIIIe siècle, XI, Idéologies de la noblesse*, Éditions de l'université de Bruxelles, 1984, pp. 64-77.
- 3) *O*, p. 1007.
- 4) *O*, p. 964.
- 5) *O*, p. 981.
- 6) *O*, p. 393.

- 7) O, p. 974.
- 8) O, p. 505.
- 9) O, pp. 1003-1004.
- 10) O, p. 466.
- 11) O, p. 448.
- 12) Pierre Richelet, *Dictionnaire de la langue française, ancienne et moderne d'après la nouvelle édition augmentée de 1759*.
- 13) Paul Robert, *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, édition corrigée, 1981.
- 14) J. Garagnon, La sensibilité comme idéologie de substitution la noblesse dans *«Aline et Valcour»*, pp. 64-77.
- 15) O, p. 395.
- 16) O, p. 423.
- 17) O, p. 958.
- 18) O, p. 510.
- 19) Robert Mauzi, *L'Idée du bonheur dans la littérature de la pensée française au XIIIe siècle*, Slatkine Reprints, Genève-Paris-Gex, 1979, p. 271.
- 20) *Précis de Littérature française du XIIIe siècle*, p. 189.

3

- 1) O, p. 649.
- 2) O, p. 651.
- 3) O, p. 649.
- 4) O, p. 650.
- 5) O, pp. 648-649.
- 6) O, p. 681.
- 7) O, p. 662.
- 8) O, p. 650.
- 9) O, p. 694.
- 10) O, pp. 682-683.
- 11) O, p. 582.
- 12) O, p. 565.
- 13) O, pp. 596-597.
- 14) O, pp. 591-592.
- 15) I, p. 333. 1 章註15で引用。
- 16) O, p. 538.

4

- 1) Albert Soboul, *Dictionnaire historique de la Révolution française*, PUF, 1989.
- 2) エンゲルス, 『家族, 私有財産および国家の起源』(1884年), マルクス=エンゲルス全集, 第21巻, 大月書店, 66頁〜87頁。
- 3) O, p. 394.
- 4) O, p. 1017.
- 5) O, p. 1061.
- 6) O, p. 981.
- 7) I, p. 447. 0 章註19で引用。
- 8) O, p. 394.
- 9) Robert Mauzi, *L'Idée du bonheur*, pp. 270-278.
- 10) O, p. 526.
- 11) O, p. 410.

- 12) O, p. 683.
- 13) O, p. 411.
- 14) O, pp. 701-702.
- 15) O, p. 704.
- 16) O, pp. 991-992.
- 17) O, p. 418.
- 18) O, p. 424.
- 19) Jean Ehrard, *Pour une lecture non sadienne de sade: mariage et démographie dans Aline et Valcour*, Colloque de Cerisy Sade, écrire la crise, Belfond, Paris, 1983, pp. 241-257.
- 20) 『女はいかにして言葉を奪われたか』, 〈文学〉1990年冬号, 岩波書店, 176頁~183頁。
- 21) O, p. 690.
- 22) O, p. 692.
- 23) O, p. 456.
- 24) O, p. 700.
- 25) O, p. 440.
- 26) O, p. 440.
- 27) O, p. 889.
- 28) O, p. 1109.
- 29) O, p. 779.
- 30) O, p. 533.
- 31) O, pp. 1003-1004.
- 32) O, p. 963.
- 33) O, p. 523.
- 34) O, p. 741.
- 35) O, p. 967.
- 36) エンゲルス, 『家族, 私有財産および国家の起源』, マルクス=エンゲルス全集, 第21巻, 大月書店, 66頁。

(広島女学院大学一般教育フランス語)